

しいむじな

発行

千葉県立中央博物館
房総の山のフィールド・ミュージアム

連絡先

〒260-8682
千葉市中央区青葉町955-2
TEL: 043-265-3111

<http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/yama/>

2022(令和4)年12月発行



特集 スナヤツメ ~悟りを開くいきもの?~



成熟したスナヤツメ (千葉県東所 4月撮影)

房総の山のフィールド・ミュージアムとは

房総の山を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」ととらえる、千葉県立中央博物館によるフィールド事業(野外で展開する博物館活動)の一環です。観察会を開催したり、旧君津市立三島小学校の校舎を利用した「教室博物館」を拠点に、地域の方々のご協力のもと、資料の収集や調査・研究等の活動を行っています。

里山を流れる川の砂底をさらうとニョロニョロとした生き物に出くわすことがあります。一見するとドジョウのようにもミミズのようにも見えますが、どちらとも全く異なる生き物で、名前をスナヤツメといいます。漢字で書くと砂八目で、砂は文字通り砂に潜って生活していることに由来し、八目は実際の目に加えて、その後方に連なる7個の鰓孔(さいこう)も目に見えることに由来します(次頁写真①)。その一生のほとんどの時間を砂に潜って生活しているため、見かける機会が少なく、多くの人にとってはなじみのない生き物かもしれません。今回の特集では3つのトピックスに分けてスナヤツメについてご紹介します。

(後藤 亮)

『フィールドノート』の紹介

房総の山のフィールド・ミュージアムのウェブサイトには『フィールドノート』というコーナーがあります。学芸員が房総の山を歩き回って見つけた生き物や地形・地質や歴史・民俗などを写真と文章で紹介しています。毎月、数本から十数本の記事を追加していますので、ぜひ、のぞいてみてください。



フィールドノートのQRコード

QRコードから「房総の山のフィールド・ミュージアム」のサイトに入り、「更新情報」にある「フィールドノート」をクリックすると目次ページ(画像)が開きます。あるいは、http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/yama/news/news_index.htm を開いてください。

(尾崎輝雄)

フィールドノートの目次ページ



連載

小櫃川流域の生きもの 台湾ウチワヤンマが 流域に飛来 ~一時的な通過か?~

今秋、下流域に広がるハス田、ハスの白や桃色の花が数輪咲いている。岸辺のハスの棒の先端に大型のトンボが1匹止まっている。「ウチワヤンマ?」。しかし、細身で、尻のうちわ状の膨らみが小さく、黄色みが少ない。「あ!台湾ウチワヤンマ」。この種はもともと南国の昆虫で北進を続けているので有名。このトンボは、なわばりをつくっていて、シオカラトンボが近づくとさっと飛び立ち、追いかけて、また、戻ってくる。しかし、夕方には棒にカワセミが止まり、小魚をとらえていた。「なわばりをつくっていながら、もういないの?」と驚いた。撮影した個体は、はねが汚れたものや破損したもので、羽化したばかりとは思えない。長旅してきたのか?と思った。

実は、台湾ウチワヤンマは、このハス田で、2019年秋に1匹見つかったから、毎年、野鳥観察者によって、年1~2回、1~3匹が発見されていた。観察情報があるとハス田に行ってみるが、見つかることはなかった。房総では習志野市、富津市、安房郡鋸南町、南房総市に、多くはオスが飛来しているが、メスも確認されている。このハス田でのメスの飛来は確認しておらず、今のところ、ただ通過しているだけかもしれない。このトンボの定着を確認するために、ヤゴの抜け殻を見つけないかと思っている。いずれにせよ、新たな南国の昆虫が、近い将来、流域に加わるはず。温暖化がより進んでいるのか?



写真:台湾ウチワヤンマ(木更津市長須賀 2022年9月14日)

MEMO 台湾ウチワヤンマ
トンボ目サナエトンボ科 全長7~8cm

お尻のうちわ状の突起が小さく黒い。台湾、中国、東南アジア、日本の南西諸島から本州に分布。本州で北東へ分布拡大中で、現在千葉県が記録の東限。平地のアシヤガマなどの水生植物が繁茂する水面の開けた池や沼にすむ。

参考文献

- 成田篤彦 2022 木更津市の南方系昆虫やカニ二類の侵入と生息状況。木更津市史研究5号:71-82 木更津市
- 尾園暁・川島逸郎・二橋亮 2012 日本のトンボ。文一総合出版
- 互井賢二 2022 台湾ウチワヤンマのその後。トンボ通信198号
- 成田篤彦 2022 房総の草木昆虫台湾ウチワヤンマ。千葉日報 10月16日

(文・写真 千葉県立中央博物館ボランティア 成田篤彦)

しいむじなの由来



房総の山のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

わずか数カ月しか開眼しないスナヤツメ、目のある個体に出会えたら幸運ですね。オオキンカメモシの匂いも嗅いでみたくありません。よい匂いの基準は人それぞれなので、「ちよつとよい匂い」を通り越して、「すごくよい匂い」かもしれません。さて、本年も残すところあとわずかという季節になりました。2023年が良い年になるよう願っております。

(千葉友樹)

編集後記



カメムシは臭いからきらい、という人は少なくありません。でも、そんな人も「きれい」と言ってもらえるカメムシがいます。それがオオキンカメムシです。鮮やかなオレンジ色に大きな黒い斑紋をちりばめ、光の当たる角度によっては青や紫の光沢が見られる美しいカメムシで(写真1)、東南アジアに広く分布する熱帯の昆虫ですが、日本にも生息しています。体長は2〜2センチ半くらいで、小さなカナブンくらいもあり、千葉県で見られるカメムシの中では最大級です。冬に南房総の海岸沿いで樹木の葉の裏側をのぞくと、何匹ものオオキンカメムシ

シが集まってじつとしてるのが見つかることがあります(写真2)。これはオオキンカメムシの越冬集団です。熱帯の昆虫なので寒さが苦手ですが、房総半島の南端部の海岸沿いではかろうじて冬を越すことができます。この地域は真冬でもほとんど霜が降りない温暖な気候だからです。そして、南房総の沿岸部はオオキンカメムシが越冬できる北限の場所なのです。ところが、夏には千葉県北部でも、いや、それどころか東北地方や北海道でも見つかることがありますので、オオキンカメムシはかなり長い距離を飛ぶことができるようです。

9月ごろ、房総丘陵の各地でアブラギリの葉や若い果実にもオオキンカメムシの成虫や幼虫が集まっているのが見つかります(写真3)。幼虫は光沢のあるエメラルドグリーンの体に黒と赤の模様があり、成虫に劣らず美しい姿をしています(写真4)。そしてオオキンカメムシの幼虫はアブラギリの若い果実の汁を吸って成長します。アブラギリは九州や四国、そして本州の中部以西に分布する落葉樹ですが、その種子から桐油を採取するために温暖な地域で広く栽培されてきました。千葉県南部でもアブラギリはよく見られます。かつて栽培されていたものが野生化したものと考えられます。越冬場所と幼虫の餌であるアブラギリが豊富にある南房総は、オオキンカメムシにとっての楽園といえるでしょう。

さて、オオキンカメムシもやっぱり臭いのだろうか、と気になる読者もいらつしやることでしょう。オオキンカメムシも触ると独特の匂いを出します。その匂いを臭いと感じるか、そうでもないと感じるか、むしろちょっとよい匂いと感じるか、は人によって違うようです。私は「ちょっとよい匂い」だと思っておりますが、機会があったらぜひ嗅いでみてください。(尾崎煙雄)

写真1 オオキンカメムシの成虫 (南房総市和田町 2018年3月12日)
写真2 ナツミカンの葉裏にいたオオキンカメムシの越冬集団 (南房総市和田町 2018年3月12日)
写真3 アブラギリの若い果実にとまったオオキンカメムシの成虫と幼虫 (君津市 2011年9月14日)
写真4 アブラギリの葉裏にいたオオキンカメムシの幼虫の集団 (君津市 2011年9月14日)

コラム

房総丘陵の動植物(27)

北限のオオキンカメムシ

特集

スナヤツメ ~悟りを開くいきもの?~

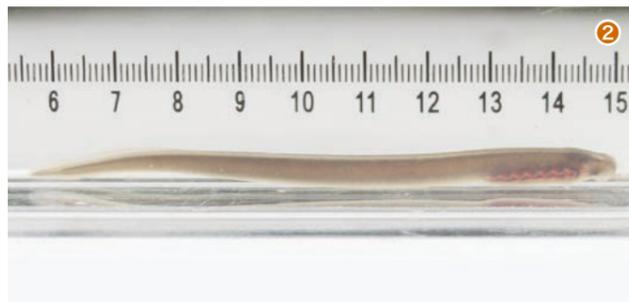
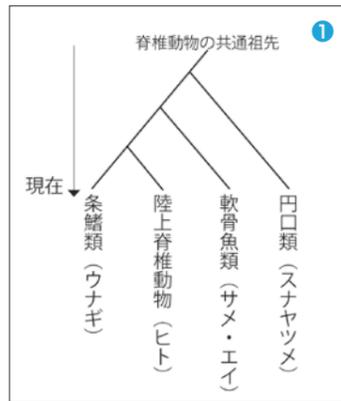


写真1 目と7つの鰓孔
図1 脊椎動物の進化過程
写真2 幼生期(アンモシーテス)
写真3 幼生期には目がない

◆他人の空似

スナヤツメ(Lichthyon spp.)は円口類のヤツメウナギ科に属する生き物です。科名にウナギと入っていますが、日本人になじみ深い蒲焼等で食されるウナギとは全く異なる生き物です。円口類は脊椎動物の中で最も原始的な特徴を持つ仲間です。顎をもつていません。図鑑などでは魚と一緒に紹介されることが多いですが、研究者によっては、円口類を魚類に含めないこともあるくらい、現生の魚類とは大きく異なります。図1

り、見た目からは想像できませんが、人間とウナギのほうがスナヤツメとウナギよりも近縁な親戚関係にあるのです。スナヤツメとウナギが似ているのは他人の空似ということになりませぬ。

◆実は2種?

スナヤツメは、日本国内では北海道から九州にかけて広く分布していますが、遺伝的な解析の結果、北海道から滋賀県・三重県にかけて分布する北方種と、秋田県以南に広く分布する南方種の遺伝的に大きく異なる2つのグループがいることが明らかになっています。しかしながら、これら2つのグループの間に生態的・形態的な違いは見出すことができておらず、依然として種としては分けられていません。千葉県では両方のグループが分布しているとされていますが、詳しいことはわかっておらず、未だ謎の多い生物です。

◆不思議な一生

スナヤツメは、生まれてから4年間はアンモシーテスと呼ばれる幼生期を過ごし、(写真2)。この期間には砂に潜り砂中の有機物を食しながら成長します。アンモシーテスは目がありません(写真3)、成熟すると開眼します(写真1)。他のヤツメウナギ類では、吸盤のような口で魚にくっつき吸血するものもありますが、スナヤツメは成熟してからは、一切餌を食べず、数カ月間に繁殖したのち、その一生を終えます。

悟りを開くことを開眼するとも言いますが、一生の大部分を盲目

で過ごし、最後の数カ月だけ開眼するスナヤツメには世界がどのように見えるのでしょうか。(後藤 亮)

参考文献
山溪ハンディ図鑑15 日本の淡水魚編・監修/細谷和海 写真/内山りゅう